

保健教育

田野原 佑美・後藤 美由紀

1 保健教育領域の基本的な考え方

(1) めざす子供の姿

東雲小・中学校では、養護教諭が学級活動や道徳の時間を活用して学級単位の授業を教科横断的に実践しており、その授業を通して行う研究の領域名を『保健教育』としている。

学校における保健教育の意義は、文部科学省の『改訂「生きる力」を育む小学校保健教育の手引き』（文部科学省、2019）、『改訂「生きる力」を育む中学校保健教育の手引き』（文部科学省、2020）の中で「保健教育には、子供たちが学習し、生活する場である学校において、健康で安全な生活を送ることができるように、そして生涯にわたって健康で安全な生活や健全な食生活を送るために必要な資質・能力を育み、安全で安心な社会づくりに貢献できるようにすることが求められている。」とされている。保健教育は、子供たちの発育・発達の段階を考慮して、学校の教育活動全体を通じて適切に行われる必要があり、養護教諭も様々な形で保健教育に参加する。養護教諭が授業に参加することは、①児童生徒の健康実態や生活実態を授業へ反映させることができること、②授業中の児童生徒の姿を知ることができること、③ガイダンスからカウンセリングへの架け橋となることができること、の3点において意義があると指摘されている。保健教育を行う上で、特に①の例として、養護教諭は集団としてあるいは個としての児童生徒を両面から分析することができる立場にあることが重要である。分析されたデータを授業づくりに生かすことによって児童生徒の関心を高め、主体的な学びへと導いていくことができる、と『学校保健の課題とその対応—令和2年度改訂—』（学校保健会、2021）の中で述べられている。在籍する児童生徒の健康な安全の生活のためには、直面している課題解決が大切であり、養護教諭の授業参加が、課題解決に直結する指導を可能にすると考えられる。

昨年度まで東雲小・中学校の保健教育領域では、保健室内外で見取った児童生徒の実態から養護教諭の専門性を生かした授業構想による保健教育を行うことにより、主体的に自他の心身の健康を保持増進するための行動が選択できる子供の育成を目的として研究を進めてきた。

今年度の東雲小・中学校の研究目的である『『共に生きるための教科等の授業づくり』の在り方に関する知見を集積することにより、自他を尊重し、共に高め合う子供を育成する』の中の、「自他を尊重し、共に高め合う子供の育成」は、保健教育領域で昨年度まで行ってきた「主体的に自他の心身の健康を保持増進するための行動が選択できる子供の育成」と重なる部分がある。自他の健康を増進するための行動選択には、自分だけではなく他者の存在も含めて選択を検討する必要がある、自己理解とともに他者理解も求められる。その行動選択の結果、集団としての意識の向上や行動の改善をはかることができると考えられる。そのため、保健室内外で見取った児童生徒の実態に沿った指導テーマを選択し、養護教諭の専門性を生かした授業構想による保健教育を行うことで、「自他を尊重し、共に高めあう」児童生徒の育成を目指したい。めざす子供の姿と保健教育の授業づくりの特徴を東雲小・中学校の研究主題に基づき、表1のようにまとめた。

表1 めざす子供の姿と授業づくりの特徴

保健教育領域で目指す子供の姿（中学校卒業時）	保健教育領域の授業づくりの特徴
生涯にわたって自らの心身の健康をすすんで保持増進しようとすることができる。 日常生活の様々な場面における他者とのかかわりにおいて、自他を尊重しながら主体性、協働性を発揮し、多様性を認め合える。	保健室内外で見取ることのできる児童生徒の心身の健康課題に関する実態をもとに検討し、児童生徒が自らの心身の健康課題に向き合い、その課題解決に向けて実践・変容意欲を高めることのできる授業構想に活かす。

2 研究の目的・方法

保健教育領域では、保健室内外で見取った児童生徒の実態から構想した保健教育を行うことにより、自他を尊重し、共に高め合うための基盤となる安心・安全への意識が高い子供の育成を目的とする。

小学校では、「ヘルスリテラシー」、中学校では「自他の多様性の理解」というテーマにおいて「共に生きるための授業づくり」を展開する。

《小学校》

（1）研究の目的

情報の信頼性の理解の達成度を測る指標「書いたのは誰か」、「いつの情報か」、「違う情報と比べたか」、「何のための情報か」の4観点について児童の理解を進め、自身に必要な情報を見つける意欲を高めるための指導を検討する。

（2）研究の方法

小学校5年生児童を対象に、以下の内容で授業を実施する。

第1時 「インフルエンザの予防」に関する情報をインターネットで検索し、「書いたのは誰か」、「いつの情報か」の観点で情報の信頼性について考える。

第2時 「インフルエンザの予防」に関する検索した情報の目的を理解すること、情報を比較検討し、自身に必要な情報を見極める活動を行う。

児童の学習活動中の様子やワークシート記述を分析することで、検索した情報の信頼性の理解を検証する。

《中学校》

（1）研究の目的

エゴグラム(杉田, 1998)により自己の内面をグラフという形で客観的に見ることで自己理解を深め、その結果から自己を肯定的に捉えた特長を見だし、個別にその特長を活かす場面について考えたことを他者と共有する活動を通して自他の多様性に触れることにより対人緊張の低下を目指す。

（2）研究の方法

中学校2年生を対象に、以下の内容で授業を実施する。

第1時 エゴグラムを作成することにより自己の内面を客観的に捉え、その結果から肯定的な部分（＝特長）を見いだす。

第2時 他者が支援を必要としている場面で自己の特長をどのように活かして働きかけるかを個で考え、それぞれの考えを班で共有する。

（3）検証の方法

授業の前後に、自己肯定意識尺度（平石, 1990）から「対自己領域（自己受容4項目）」「対他者

領域（自己閉鎖性・人間不信 8 項目，自己表明・対人的積極性 7 項目，被評価意識・対人緊張 7 項目）」の計 26 項目を抽出したアンケートを実施し，自己肯定意識尺度の対他者領域の項目を用い，評定値の事前事後比較を行う。また，授業後の感想記述分類についても分析を行う。

【引用・参考文献】

文部科学省(2019),『改訂「生きる力」を育む小学校保健教育の手引き』

文部科学省(2020),『改訂「生きる力」を育む中学校保健教育の手引き』

日本学校保健会(2021),『学校保健の課題とその対応－令和 2 年改訂－』

杉田峰康(1998),『教育カウンセリングと交流分析』, チーム医療

平石賢二(1990),「青年期における自己意識の構造－自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康」,
『教育心理学研究』, 38 巻, 320-329